

てファツシヨではないといつてゐる。この事は實はファツシヨの様質を説明してゐるもので、大衆作家がこの時代のために動員されてゐたか私達にはよく解つてゐた。

二月十五日には、私達は築地小劇場で、「IATB」國際プロレタリア演劇」の競演を見てゐる。この催しは十三日に行はれる筈であつたのを、検閲の都合を理由として上演を一時延期させられたものであつた。この競演は、當時の逆行勢力によつて、一層力強いものにされてゐた。殆んど一千人に近い人々が熱狂して演劇の進行を視守つてゐた。この日、朝鮮の俳優達は、オット・ミューラーの「荷車」を朝鮮語で上演したが、その技術は勝れてゐて、日本人側の観客を驚かしたほどであつた。一體に朝鮮人の演技は形が大きくて、支那演技の系統を持つてゐるやうに私には思はれた。日本側では、めざまし隊の「青いユニフォーム」は人々を強く感動させた。最後の各劇團の行進列は、観客を徹底的に感激させた。然しこの頃から、日本のプロレタリア演劇は、その進行の路が益々困難になつて行くであらうことを思はせた。

この月の十七日には、中立無産黨から立候補した、××××××××、それに關聯して多くの進歩的な文化運動者がシムパサイザーとして檢舉されてゐる。十七日には既に七十名ほどの檢舉者を見てゐる。この頃の毎日の新聞はファツシヨの記事で一杯になつてゐる。新渡戸博士が四國の講演旅行で「××共産黨以上に危険」だといつたといふので、在郷軍人達に襲撃されようとしたのもこの頃であつた。

三月五日には、またファツシヨの暗殺が行はれてゐる。この日午前十一時頃、三井合名會社理事長の團琢磨が自動車から降りて玄關へ入らうとした刹那、一青年のためにピストルで射殺されてゐる。青年は取調べの進行中によりファツシヨ青年で、中農のイデオロギイを背景とした農民主義的思想の所有者であることが解つた。このことは、私達に日本の農村生活の窮迫が何の程度に達してゐたかといふこと、またそれに對して國家が何事をも爲し得ないであることを痛感させた。

その間にも進歩的文化運動に對する壓力が日に日に加はつて來てゐた。三月六日に築地小劇場で行はれた「働く婦人の夕」の會は、開會の辭とともに中止解散を命ぜられ、三月二十日キリスト教青年會館で行はれたプロレタリア・エスペラント同盟の大會も開會と同時に解散を命ぜられた。これらはすべてプロレタリア文化運動の統一活動である「文化聯盟」(コップ)に對する壓力であつた。その結果プロレタリア科學の中央委員の殆んど全部が××××××××した。小川、寺島、河野、平田、野村、岡田その他はこの頃から私達の傍から一時的に姿を消して行つた。

四月二十九日、天長節の日、上海に於ける天長節祝賀式場で「君が代」合唱の二回目に式壇の後方



から爆弾が投げられ、白川、植田、野村の各將軍、重光公使、及び河端民團長は重傷を負うてゐる。この事件は良心的な日本の一般民衆に、深い反省と靜慮の機會を與へたやうに私には思はれた。

今年のメーデーは第十三回目のメーデーで、フアツシヨ時代の最初のメーデーとして記録さるべきものであつた。この日は初夏のやうな暑い日で、参加人員の上では例年より寧ろ多く、一萬三千人に達したといはれてゐる。今年は去年の経験からか列外を嚴重に警戒して、朝の内に列外デモを二三百名ほど檢束してゐると新聞が報じてゐた。「アナ」と「ボル」との對立、「排同」「合同」との對立等で出發前、會場内で亂闘が行はれてゐた。私は市電従業員達の行列を迎へてから電車で上野へ出て見た。今年是一般民衆を絶對に山に上らせなかつたので、山下は大變な混雜であつた。行列の中には山下で殆んど檢束されつくした一隊さへあつた。散會頃に司會者及び副司會者が檢束されたが、間もなく釋放されたといふことが報告されてゐる。散會後小雨が降つて來た。フアツシヨの中のメーデーとしては可なり力強いメーデーであつた。

この月の十一日には、作家同盟大會も開會と同時に臨監によつて中止解散を命ぜられてゐる。散會後五十人ほどの人々がデモを行つたといふので、殆んど全部檢束された。十五日には、犬養首相はフアツシヨ軍人のために白晝首相官邸で暗殺されてゐる。これが即ち五・一五事件であつた。解禁され

た記事によると、犬養首相は射殺される以前に「お互に話せば解ることではないか」といつて、軍人をテーブルに招しようとしたのを受けつけずに、ピストルを發射したといふことである。こんな××××世の中に存在するであらうか？ 戦場で死ぬのも死であり、國內戦などで死ぬのも死であるが、それらの場合は死を覺悟してゐるのである。白晝對者が靜かに對談を求めてゐる時に、その人の前額にピストルを當て、××××××であらう。この××××××は一體何處から來てゐるのであらう？ 六月十八日、私は「文化聯盟」の大會の前日、高田署に豫備檢束をされてゐる。こゝの監房の中には、放火犯の被疑者と、不正日歩貸しの集金人達が留置されてゐた。また女の留置室の中にも、放火犯の被疑者がゐるが、この女の被疑者は、蒼白な顔をして彫像のやうに眞正面を向いて眼を閉ぢてゐるのが私をひどく感動させた。この種の犯罪の行はれてゐることは、中小商工業者の極度の貧窮化を物語るほか何物でもないと思は考へた。

私達は、この年労働者のイニシヤテーズによる「ソヴェイト友の會」の發會式が佛教青年會館に行はれてゐるのに臨んだ。この會の創立によつて、從來の「ソヴェイト友の會」は「日ソ文化協會」と改稱され、從來發行されて來たグラフ「ソヴェイトの友」は新たに出來た「ソヴェイト友の會」に譲渡されることになつた。即ち「日ソ文化協會」は「對外文化聯絡協會」の線に添うて、兩國の文化交流







く結局人間である。私はシビリヤコフの北極探検の成功は、ソヴェトの共同作業即ちソヴェトの組織力によるものだ確信してゐる。」

と、シユミツト博士が語つた。

外は非常な嵐になつた。「シビリヤコフは北氷洋を持つて來たんだね！」と私達は語りながら暴風雨の中を家に歸つた。

十二月に入つてから私達は布施辰治の慰勞會を「美松」に開いてゐる。布施は進歩的な辯護士として長く×××法廷に辯護の勞をとつてゐたが、大阪裁判で裁判官を侮蔑したといふ理由で懲戒裁判に附され、東京辯護士會から除名され、登録を取り消された。そしてこれを機會に彼は私人として労働者農民の味方として、また著述家として活動することを決心した。この會合は彼に感謝し、彼を慰勞し、且つ激勵するために開かれたものであつた。藏原惟郭老を初めとして百六十人ほどの労働者、農民、思想家、文學者がこのホールに集つた。多くの××家族も立つて熱烈な感謝の辭をのべた。十二月といふのに全身に汗ばむやうな熱狂的な會合であつた。

昭和八年（一九三三）五十一歳

一 昨年の秋頃から力を得て來た逆流は、今年に入つて益々その勢を強め、日本のあらゆる文化生活の底に音をたて、流れ初めてゐる。勿論その逆流の被害を被る最も直接な面は、労働者農民の組織、結合及び進歩的な文化活動の領野でなければならなかつた。各職場を基礎とした労働者の文化的結合である「サークル」活動は、今年に入つてからは全くその自由を失つてしまつてゐた。更らにこれを私達文學の領野に局限して考へても、文學の「創作方法」の問題が新たな課題として私達に與へられてゐたが、それらのことについて充分討議すべき會合の合法性をさへ失ひかけてゐた。然し、創作方法の問題は、進歩的文學者に對して一つの反省を與へ、現實の消極的、積極的面を正しく認識し、これを形象化して行かうといふ新しい勇氣を與へて呉れた。現實に直面して徒らに焦慮するよりは、その現實を正しく把握し、これを藝術的に表現しようとした。また一面、この逆流時代の社會現象を永續的な固定したものと考へるところから、一種の絶望觀が生れ、或は現實を超越した一種の觀念主義的傾向を産んだ。前者はリアリズムの運動であり、後者はローマン主義的な提唱であつた。

私達はこの年の初頭に二人の歴史的人物を失つてゐる。一人は堺利彦であり、一人は小林多喜二であつた。

私は明治三十六年（一九〇三）の頃から堺の聴講者の一人で、大正七年（一九一八）の頃から個人







急進主義者を追ひ出してゐる。トーマス・マン(一九二九年のノーベル賞受賞者)ヤコブ・ワツセルマン(ガスパールハウゼルの著者)、表現主義の作家フランツ・ウエルフェル(「鏡人」ユデア人の中のパウルス」の著者)、ゲオルグ、カイゼル(「カリーの市民」朝から夜中まで」の著者)等もやられてゐる。それかてゐる。教授の書いた「刑法讀本」が發禁になつたのを機會に文部省は教授を大學から追ひ出さうと



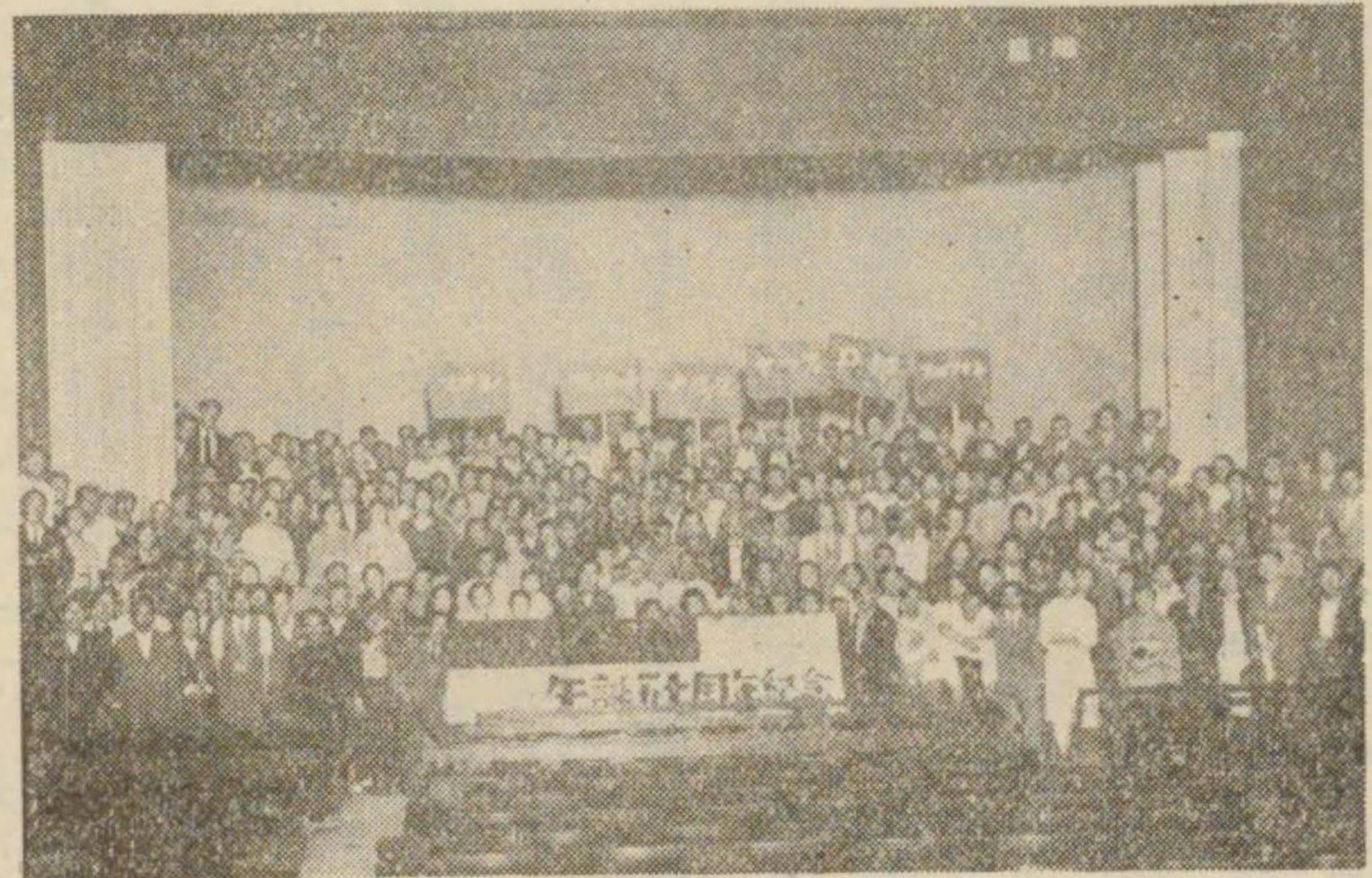
(A) 昭和八年、生誕五十年の著者

ら進歩的な著述、例へばマルクスレーニン、ラツサール、ベルンスタイン、アンリー・バルビユス、アプトン・シンクレア、エミールルードキヒ、シュニツツラー、ルマルク、トーマスマン、フォイヒトワングル、ラテナウ等の著述、即ち「非ドイツ的なるもの、燒却」をベルリン目貫の場所で行つてゐる。

この同じ頃に、國內的には京大瀧川教授の休職問題で大騒ぎをし

したのが動機で、京大法科教授團が「大學の自由」を叫んでこれに抗議し、小西總長は教授の休職を「具申しない」ので、文官分限令で休職を命じた。總長自身も辭職の意を洩し三十名の法科教授も辭表を出してゐる。鳩山文相は京大新聞の記者に下のやうに答へてゐる。

「要するに時世だ——今日の思想も封建時代には合



(B) 昭和八年、生誕五十年の著者

採るかも知れない云々。」私達はこの事件とナチスの焚書事件とを聯關させて考へる必要がある。然し、またこれと同じ頃、私達は上野で開かれてゐる「萬國婦人子供博覽會」に、ソヴェトの有名な兒童教育家であるメクシン及びクラフチニコ女史の二人の代表を迎へてゐる。この二人の教育家達は、ソヴェトの兒童教育に關する多くの貴重な文献を博覽會に提供し、また多くの教育者、兒童文學の



作家達と會見した。この利益は實に多大であつた。殊に日本の女流教育者、作家達がクラフチンコ女史との接觸により、實際上の利益を得ることも多かつた。また二人の代表者も、日本の學校、託兒所の視察によつて多くのものを學んだといはれてゐる。

六月六日に、私の「生誕滿五十年の祝賀會」がレーンボー・グリルで開かれてゐる。これより先き「プロ美術」の矢部友衛が油繪を、佐田四郎は彫像を私のために製作して呉れた。私はこの逆流時代に個人の生誕を祝福することを再三辭したのであつたが、これは決して「個人的なものではなく、同志的欲求」によるものであるからといふので私は説得されたのであつた。この日は定刻前二百餘名の入々は私の記念を中心として集つた。大廣間は一杯にテーブルが並べられて、その正面に二人の藝術家の製作品が置かれてゐた。出席者の顔を見ると、殆んど歴史的な排列が出来る位多方面の人々であつた。佐々木孝丸の司會で、鳴海(要吉)、土岐、米川、神近、中村(星)、木村、橋浦、小牧、藤森、江口、林(房)、岩崎、山田の諸君が感想をのべた。更らに小牧近江からはロマン・ローランの提唱してゐる平和運動に關する提議がなされ、藤森成吉はそれに答へた。最後に私は立つて、「私は今日の會合は私個人のためになされるものとは考へない。私は同志的感情をもつて諸君に感謝する。私は將來も一人の作家として活動をつゞけたい、例へ、小さな作家としても、ロマン・ローランや、アン

リー・バルビユス達がヨオロツパの良心として立つてゐるやうに、日本の社會に於ける一つの良心的存在として生きて行きたい」と答へた。

六月七日には「生誕五十年記念」の第二日目として、私は築地小劇場で行はれてゐる「舊藩守と火事」、「唄うたひの家」及び音楽の會合に招かれてゐる。私はシユブレヒ・コールの中に呼び出されて文化團體及び聽衆に感謝の辭を説いた。私は少年劇團の可愛い俳優達に圍まれながらフットライトに照された時、私の肩の上に大きな荷物を載せられたやうな感じがした。そして、まぶしいフットライトの光の中から、五十年、四十年、三十年、二十年、十年の舊い友達の顔が浮び出て來た、そして私の顔を見て皆が微笑してゐた。

最後にこの年八月に上海エスペラント協會發行の“*LA Mondo*”の上で、中國及びミンスク市の同志から深厚なメツセージを送られたことを記して、國際的な感謝の意を表して置きたい。(終)



附録 幽閉記録

一九八

一九三三年、八月二十日(日) 幽閉前日。  
ひる頃雨、可なりな雨になつた。

ロード・マーレー(英) ジャン・マルトウ(ベルギー) ウアイアン・クチュリー(佛) ジョン・ト  
スパス(米) ゼラルド・ハミルトン(英)、 ジョージ・ホツピー(フランス) 等がアンドレー・ルボ  
ン號で上海到着、宋慶齡女史に迎へられたと報じてゐる。殊にウアイアン・クチュリーとはモスクワ  
のピリニヤーク家や「ヘルツェンの家」(文士クラブ)などで逢つてゐるので彼の明い顔、快活な子  
供らしい態度などがすぐに思ひ出された。私は事情がゆるされて、彼に逢ふ日のことなぞまで聯想し  
た。

夕方、M署のS刑事が訪ねて來たので二階に上げて雑談をしてゐると、Sは歸りしなに「本廳のS  
さんが、お話を伺ひたいことがあるさうですから、明日九時頃署までいらつしてくださいませんか」  
といつた。

「何んな用件ですか、また例の××ですか？」

「いえ、然んなことはないやうです。」

といつて、S刑事は笑ひながら歸つて行つた。

私はSの歸つた後で、例のやうにステツキを持って、何處といふあてもなく散歩に出た。私は散歩  
の間も、時々、明日の呼出しの事件を想像したりしたが、屋外の新鮮な空氣と、適度の血行は自分か  
ら不安を一掃して呉れた、そして家へ歸つて來た頃は殆んどその事を忘れてゐた。娘達は赤坊を間に  
挟んで安眠してゐた。孫の良一は小さな手を大の字なりに開いて、上唇が小さな富士山の形をして天  
井をのぞいてゐた。

八月二十一日(月) 幽閉第一日。

近頃自分は赤坊の聲で朝起きの習慣がついてゐたので、八時頃に眼を醒した。日光がガラス戸から  
せまい書齋を襲撃してゐた。小さな塵埃が光線の中で盛んに舞踊ををどつてゐた。だが、自分は眼を  
開くと同時に今日の責任を思ひ出して一寸不快な氣持ちになつた。

九時頃、私は妻と子供に對して、

「一寸M署へ行つて來る。大抵すぐ歸へれると思ふが、歸つて來ないでも心配しないでいゝ。何にも



事件がないのだから。」といった。

妻と子供達は不安さうな顔で、自分の顔を見てゐるのを感じながら、努めて冷静な態度で、「もし、四五日歸らないやうだつたら、岩波書店から批評を頼まれた國定教科書を手紙を添へて返へすやうに。」

と娘にいひつけて私は外へ出た。

朝から蟬がやかましく鳴いてゐた。黒と白の夏服でステツキをふりながらM署へ出頭した。1部長が特高室から下りて来て自分を叮嚀に迎へて呉れた。署の人々は自分の方へ一勢に顔を向けたが、またすぐに自分の仕事の上に眼を持つて行つた。

特高室では刑事達は申し合はせたやうに自分に挨拶をした。主任は自分に愛嬌をふりまきながら、ちやうどその時割つたばかりの西瓜を自分の前に出した。自分は幾らかの不安もあつたが、それを紛す氣持と、幾らかユーモラスな氣持でその一片を受取つて喰べた。O主任は色々な雑談を仕向けて來た。その間、私は四五本の煙草を喫んで時間をつぶした。

午後一時頃になつて本廳のS警部がいそいで室に入つて來た。O主任はSにも西瓜をすゝめた。Sは日焼けのした額の汗を拭き、西瓜の一片を頬ばりながら自分の方を笑ひながら見て、

「君だけ安全でゐるので、少し耻しいだらうと思つてやつて來ましたよ。」

と、S警部は自分に皮肉を飛ばした。Sの皮肉は自分に對して、本質的には應へるところのないものではあるが、さうかといつて、理解されないほど縁遠いものではなかつた。なぜなれば、近來進歩的文化運動者は、政治的進出といふ意味で、官憲の××を受けてゐる時であるからである。一言にしていへば、シンパ問題が進歩的な文化運動者の上に襲ひかゝつてゐる時だつたからである。

S警部は私の特高室に隣つた小さな調査室に呼んだ。Sは黒い大きな手提鞆の中から澤山の寫眞を出して、その中から手際よく一枚を抜きとつて私に示した。

「君はこの人を知つてゐるでせう？」

自分は全く事務的に撮影された小型の寫眞の上に眼を投げた。

「知つてゐます。」

と私は答へた。

「私は今君を××××といふやうな意思はない、然し、事實は正直にいつてもらはなければ困る。」と前提して、私の取調べを開始した。Sの言葉は低かつたが、明かに人を裁判する人の聲に變つて來た。事件は想像したやうにシンパ關係のものであつた。自分はそのことに關して前に取調べを受けた



人からもきいてゐたので、大體の當りはついてゐたが、事實としては全く記憶を逸した事柄であつたので、その通り答へると、「二人の調書によれば、君は明かにそれを行つてゐる」といふのであつた。自分達の間に短い問答が交はされた、その結果下のやうな宣告が下された。

「兎に角、もう少し考へてもらひたい、そして眞實のことを返事してもらひたい。僕は二三日すればまた來るから。」

これがSと私とのこの日の最後の交渉であつた。自分はこの日はすぐに××されるものとは想像もしなかつたので、やゝ意外な感じがした。勿論、自分としてはこのやうな場合の最悪のものを準備して來てはゐたのだが。短い苦痛の感情は、ある他のものによつて軽くされたやうに感じた。それは、今日の日本、殊に自分の周圍に於いては決して孤立したものではないといふ感情である。この二つの相反した感情は短い時間に烈しく闘つた、そして私の感情は反抗心や、不満の代りに、多くの先行的な犠牲に對する謙遜さといつたものとして居坐ることになつた。(お前はこんな小さな災厄に對して、そんなに大袈裟に考へるのかと人は可笑しく思ふかも知れないが、事實はその通りであつた。)

S 警部の歸つた後、主任は立つて私のところへ來て、

「お氣の毒ですが、着物を着かへて、手記を書いてください。K君、手記を書く紙をあげて呉れ賜

へ。」

と主任は、私の方からK××に眼を移した。私は家から届けてよこした浴衣の上にバンドをしめて、調室のテーブルの前に生徒のやうに坐らせられた。

「あなたは、あんまり原稿を書かないのでお嬢さんに叱られたさうだが、少し勉強して書いてください。」

K 刑事がいつたので、自分は笑つた。この人は「婦人の友」を読んだらしく思はれた。自分は然しすぐ冷い感覺で笑ひの感情をなくしてしまはなければならなかつた。それは手記の最初の部分で、自分の生立ちのことを記さなければならぬからだつた。そして、そこでは不幸な一生を終へた父の記憶がすぐ私の胸をついたからである。

八月二十二日(火)晴。

私の前に同房の人達の姿がはつきりと現はれて來た。私にとつては幽閉生活は最初ではなかつたが今度の幽閉生活は幾らか長いかも知れないといふ豫感があつたので、朝の光線の差し込むのと一緒に、この共同生活に親しんで行かうと決心した。ちやうど田舎出の小僧が最初の都會での仕事を見習ふやうな氣持で、共同作業を教はらうと思つた。仕事は何處でも行はれるやうなものではあつたが、



うす縁をめぐつて床板について塵埃をはたく仕事、はたきをかけ、板間や壁を拭く仕事が完全に分業的に行はれて行くのは、自分には非常に嬉しかった。こゝは他から強制されたコムミュン形態である。自分達で掃除をした室の中に平等な権利で坐することは、そのことだけを抜き離して考へると、得がたい喜びであつた。七人ほどの共同生活者の顔が自分を見てゐたやうな気がした。自分もあいさつをするやうな氣持で皆の顔を見た。

外では私達を監視する役人が、靴音をたて、廊下を歩いてゐる。時々この人の顔は網戸の近く寄つて中を覗いて行く。錠前の音が人を威嚇するために響いてゐる。

自分は午前中に特高室に呼び出されて、手記を書かされた。こゝでペンを走らせるのは實に嬉しかった。たとへ小さな運動でも、手足を動かすことは愉快なのであらう。尙ほこゝでは私達は煙草もゆるされてゐるからでもあらう。私はこの日から毎日呼び出されて取調べを受けたり、手記を書いたりすることをこの上のない楽しみとした。私は特高室のKが入口の窓に立つのを戀人を待つ人のやうに待ち望んだ。

八月二十三日(水)晴。

共同生活者の顔は、だんぐ、それぐの特色をもつて自分の眼に入るやうになり、それと同時に

その人達の顔は自分に親しいものになつて來た。最初醜いと思つた顔も、醜いなりに魅力をもつて寫つて來る。

自分の共同生活者——七人

H——思想 二十二歳

S——強盜 二十五歳

T——窃盜 二十七歳

O——詐欺 三十五歳

K——猥褻 二十五歳

其他。

この内、思想は最も長い滞在者で、勿論最も知識的であり、この共同體の指導者の役をつとめてゐた。強盜のやうな一見烈しい性格の持主のやうな男も、よく青年の指圖を受けて働いてゐた。Hと同じやうな運命を荷なつた人はこの共同體の中に四人ほどゐた。自分もまた同房者として、共同生活の作業をHから教はつた。「忍苦」といふことも同時に示された。思想の人ばかりでなく、この共同體では如何にして健康を維持して行くべきかといふことは大事な仕事の一つである。刑務所のやうに、



こゝでは運動の場所と時間が與へられてゐないので、人々は上體と下肢を絶えず運動させる工夫をしなければならぬ。長い共同生活者は、その工夫を十分に發見してゐた。ある人は禪の様式を採つたり、ある人は靜座の形をしたり、また、ある人はいつでも跣足の時のやうな姿勢で腕を曲げて、相互にそれを前後に動したりしてゐた。自分は最初それを見てもう少しで吹き出すところであつたが、そこに既に社會人としての闘争があるのだと思つたら、自分の上すつた氣持が恥しくてたまらなかつた。

自分はこの日、自分達と房の反對の側の第一保護室の中に中年の女のゐるのに氣がついた。四十四五歳の中流階級(中産階級ではない)の女らしく、上品な顔だちをしてゐたが、耐へ難い心勞に血液を全部失つてしまつたやうな蒼白な顔をして、何處か一點を凝視してゐるやうに思はれた。私はこの女は娘の嫁入りの費用を得るために、自分の家に放火した、といふ嫌疑を受けてゐるものだ、といふことを共同生活者に教はつた。

#### 八二十四日(木)晴。

今日も特高室で手記を書いてゐると、上田進(娘の夫)が訪ねて來た。すぐ面會を許して呉れた。私是一寸胸の鼓動の烈しく打つてゐるのを感じたが、自分は彼に健康であることを示さうと努力した。

それは自分の家族の者達に語る最上の言葉だと思つたからである。

○主任は自分の席から、

「お父さんは家で原稿を書かないさうですから、こゝで原稿を書いてもらつてゐますよ。なあに、あと二三日で歸れますから心配しないでいいです。」

と、關東なまりのある言葉でいつた。

上田は淺黒い顔に皺を寄せながら金を差入れて行つた。

#### 八月二十六日(土)晴。

空はよく晴れて海のやうだ。自分達の房の壁を射る光線は日時計の役を果してゐることを發見して、自分はHと長い間日影を見つめてゐた。自分は娘の幼い頃、バイロンの「シヨンの囚人」を譯讀してやつたことを思ひ出して、それをHに話してやつた。もと文學書生であつたHはそれにひどく興味を感じてゐた。

昨日自分達の房の中に一人の侵入者があつたが、この男のために六人の共同生活者は非常な不安に襲はれた。男は猥褻罪で拘引された不良學生で、猛烈なひぜんかきであつた。某大學生だと自稱してゐたが、彼は中學生ほどの知識をも持合はせてゐなかつた。彼は私達の房へ入るなり、盛んにひぜんを



搔きはじめたが、その度毎に血膿の交つた皮が疊の上に一杯に飛び散つた。Hは四五枚の紙を與へて血膿や皮をそれでとるやうに命じたが、にや／＼して一向それを實行しない。そこで房の人達はこの男を隔離してもらふやうに××に懸合つたが、××は、「それではこの男を他の房へ入れろといふのか？」といふ質問をしたので、Hはそれを否定して、房外に置いて呉れといったが、それは前例がないといふ理由で却けられた。

「結核患者だつて房に入れてやつてゐるぢやないか、それ位のことには我慢しなくつちやいけないよ。」

と××は結論した。

然し、この日の夕方、自分はこの房を出されて、隣の房に移された。自分だけはひぜんの危険から逃れ得たが、住みなれた同房者と別れるのは可なりつらかつた。

八月二十八日(月)晴。

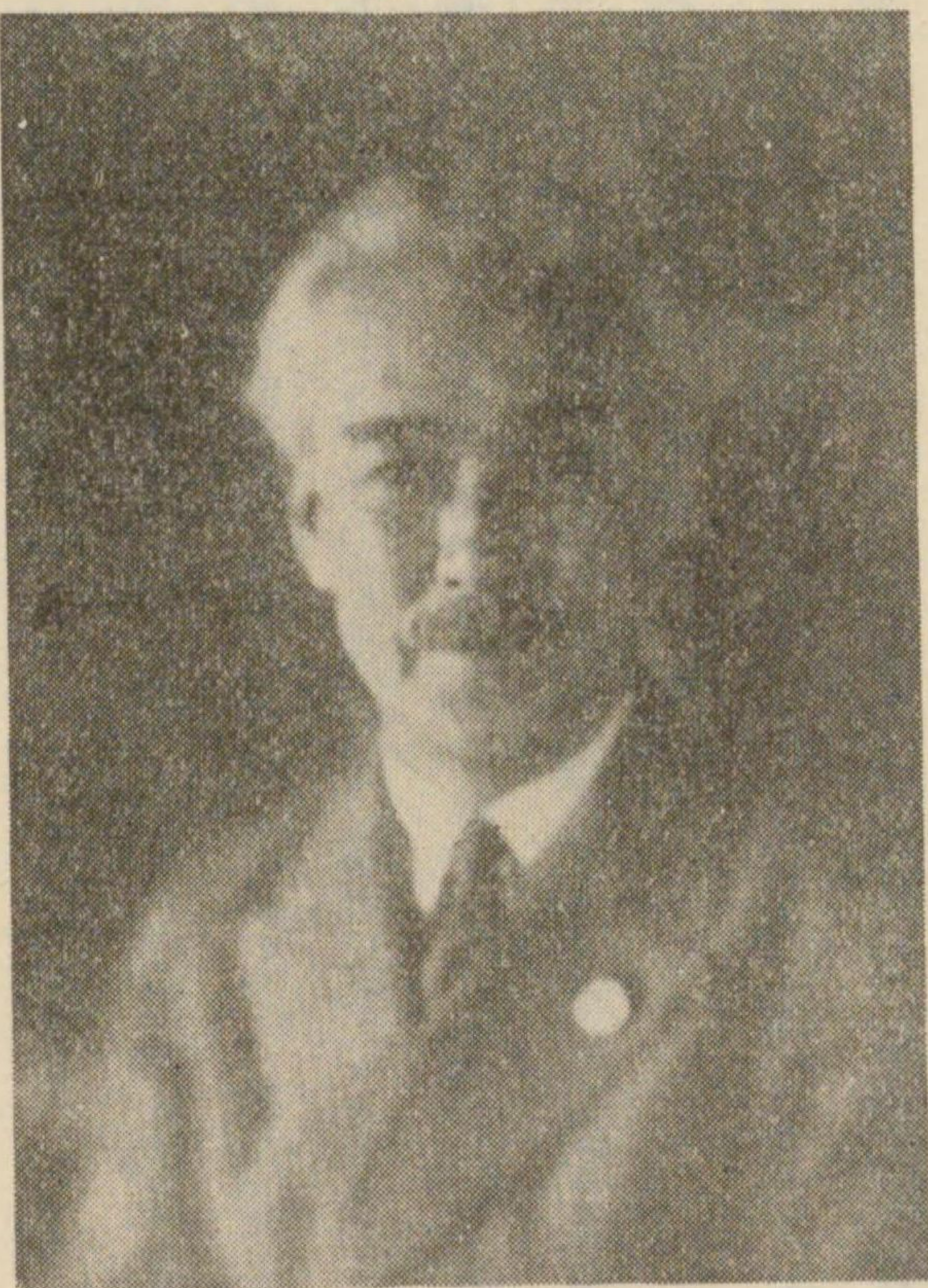
今日から共同体内の一日の生活の記録をつくつて見よう。

朝——六時起床。

起床後の共同作業のことは前に簡単に記して置いた。房内での眠りは、時間の上からいへば、八時

の就床、六時の起床だから、十分な筈であるが、大抵不十分な睡眠しかとらないやうである。然し、朝の光を求める氣持は、十分の睡眠のためではなく、寝飽きることの苦しさから來てゐるやうだ。うす縁の上に毛布二枚敷いただけなので、初めの一週間ほどは全身が痛んで何うしても安眠が出來ない。半醒半眠の狀態をつゞけてゐるものには朝の來るのは大きな喜びである。大きな不幸災厄に逢つた時でさへ、朝は喜びを持つて來るのが通例である。

(第十二)



最近の著者

朝食——七時に初まる。辨當も最初の内は咽喉を通らないのが普通であるが一週間ほどを過すとその辨當は非常に待遠しいものになる。自分は青年期に芝居の初日に招待されて、そこで出される辨當をまづいなぞと生意氣を言つたこともあるが、こゝであてがはれる味噌汁づきの朝の辨當は決してまづいものではない。普通、辨當の飯(舍利といふ符牒言葉がつ



いてゐる)は茶椀に二杯半ほどの量があるが、自分などには十分だった。朝の辨當にはお汁のほかは漬物が二片ほどついてゐる。自分は齒が悪いので固い大根には弱らされた。

晝食——にはお汁はつかない代りに何かおかず(タンポといふさうだ)がつく。それから椀に一杯の湯が注がれる。自分には晝食が一番まづく思はれた。夕飯には漬物の他に魚或は焼豆腐の小さな一片か、こんにやく數片がつく。自分は餘程貧乏性に生れたと見えて、焼豆腐は大變うまかつた。魚は大抵鮪の血あひであつたのには閉口した。鮪の刺身は明治の十五年ごろまでは下等なものとして普通に食膳にのぼらなかつたものだ、ある先輩からきかされたことがあるが、鮪の血あひにいたつては、恐く犬猫でも喜んで食はないものであらう。その血あひを自分達の唯一の魚としてお互に配ち合つて(ある場合には争つて)食つた。

共同生活の化粧室——即ち便所及び洗面所は、異様な臭氣を發するので驚かされた。大抵の便所は慣れるに従つて臭氣を感じないのが普通であるが、こゝの便所だけは毎日その臭氣の度を増して行くやうに感ぜられた。自分達の共同體では、便所へは二時間置きに出されたが、こゝへ出されるのは共通にゆるされた一つの散歩でもあつた。便所へ行つて、それから洗面所で顔を洗ふのが、自分達の一つの享樂でもあつた。

自分はある時洗面所で顔を洗つてゐると、奇智に富んだ一人の××が、

「おい〜お翁さん、君の髪は幾ら洗つても黒くはならないよ。」

といつたので皆で吹き出したことがある。

大便所から小さな白い幼蟲が匍ひ出して來て、前板の左右の壁を匍ひのぼつては途中で落ちて來、落ちてはまたのぼつて行く根氣には驚かされる。柳に蛙を見て悟道に入つた人はあるが、幼蟲の根氣を見て悟道に入つたのは恐く自分だけであらう。

就床——は夜の八時で、室の古參者が第一保護室に置いてある毛布包みをとりに行く。その毛布の内二枚だけを床に敷いて、一枚をかけることになつてゐる。この共同のベッドを作るために、房内は一時ざわざわする。その時は一番解放された心持になる時である。この時だけは監視の××も幾らか大目に見て低い雑談などをゆるして置く。人々は便所から一人一人かへり次第、毛布と毛布の間にくるまつて行く。機械主義は到るところにあつて、こゝでも、ある××は就寝前に雑談をしたといふので留置人にビンタを喰はせたことがある。

八月三十一日(木)晴。

自分はこゝでは房の外の、音の襲撃に弱らされた。この邊は三十年前までは森になつてゐて、その



森を出たところの並木道には、甘酒屋などが出て肥料車を押した東京近郊の百姓の若衆や娘さん達は汗を拭きながら甘酒をのんでゐるといふ牧歌的な情趣をよく見かけたものであつた。自分達の今ゐる房は、實にその櫻の並木道の初まる邊であつた。房の外には厚いコンクリートの塀が立つてゐて、その外は近頃、工事を施したばかりのコンクリートの舗装道路になつてゐた。この道路を過ぎて行くあらゆる音はコンクリートの塀に響いて、自分達の房をその音の中にこね廻はしてしまつてゐた。

殊に、就床後は一層この音に苦しめられた。遠い先方から走つて来る自動車の音を迎へて、その音がだんだん大きくなつて最高度に達して、またそれがだんだんに弱つて全く消えてしまふまで自分達の神経は活動をやめなかつた。一つの音が行つてしまふと、またほかの音がやつて来る。然かもその音は右からも左からもやつて来る。その音をきいてゐると、神経はますますいら立つて針のやうに尖つてゆくのを感ずる。この雑多な音の送り迎へに、朝の五時頃から夜中の二時半頃までを費した。夜中の二時頃になると、やうやう自動車の音は眠りこけてゆくやうに消えて、その後にはカタンコトンといふ肥料車の音が牧歌的な記憶を呼びおこして呉れる。自分はその頃初めて浅い眠の中に入り込んで行つた。この習慣は殆んど共同生活の最後までつゞいた。

私は、新しい房、即ち第三留置室と呼ばれてゐるところでは、一人の思想と三人の窃盗と一人の天

理教と一人の街の紳士といはれてゐる大政治家と共同生活をした。一人の思想はやはり二十二三歳で前の房のHと殆んどおなじやうな經歷を持つてゐた。街の紳士は、肥つた腹をつき出して、両手をゆつくりふりながら調室へ呼ばれてゐたが、とうとう二十九日の拘留に處されてしまつた。

「何もかもめつちやくちやぢや！」

と街の紳士は歎息をもらしてゐた。

### 九月一日（金）晴。

房の外では蟬の聲が烈しくしてゐる。手記は既に終へてゐるのに、長い間取り調べも受けなければ調書をとりに来ない。

不安がつるばかりだ。何か自分のために不合理が行はれてゐるのではないかといふやうな不満と疑ひが起つて来た。自分はそのやうな個人的な感情を社會性によつて取りのぞかうとあせつたが、あせればあせるほどその感情が自分を襲うて来る。自分は封建主義的雰圍氣の中に、襟首をつかんで投げこまれたやうな感じがした。

よしあしのわかる時あらん蟬時雨

といふ駄句を口ずさんだ。この封建詩形は今の自分を自嘲するためには幾らか役立つた。







あるが、留置所は封建主義の残存形態だと教はつたことがある。實にその通りである。自分は今日までの短い期間の経験からいつても、日本に於ける留置所は最も改良の餘地のあるものであつて、従つて研究材料は殆んど無限といつていゝほどである。×××の臭氣を分析するだけでも、科學者には確かに學位論文を請求するだけの價値がある。

この封建殘存制度による共同體の監視は何んな人々によつてなされてゐるであらう。自分達の共同體には四人の役人がゐて、二人づゝで一日交替であつた。

A——四十歳位、全體が四角な感じを與へる老警官、模範的な牢番タイプである。

I——三十七八歳位、軍人上りで一種の二重人格者である。習慣的に××××××。

A——三十二歳位、大阪商大中途退學、スポーツマンで、快活な人である。

N——三十二歳位、日大卒業、文學青年で、留置所生活を取材とした長篇小説を執筆してゐる。人道主義者である。

この四人の看守はめいめい異つた性格を持つてゐるが、大體に於いて二つのタイプに分けることが出来る。AとIは封建主義的であり、保守的であり、AとNは警察的新人タイプで、今日の留置所制度には適しない人々であるが、一人はスポーツに慰安を求め、一人は文學の世界に逃れてゐる。後の二

人に共通したタイプは、今日の警察官の中には可なり多いらしい。然しその人達の多數は大抵中途で方向を轉換するといふことを私は友人からきかされたことがある。それをしなければ、今日の警察制度の中には住み得ないものであるらしい。

この日、自分は特高室へ呼び出されて行くと、そこに自分の娘が赤坊を背負ひ差入物を持つて立つてゐた。自分は極めて快活な態度をとつて應待したが、可なりセンチメンタルな感じに襲はれた。孫の良一は自分の顔を見忘れてゐた。娘は洗濯をした浴衣を置いて歸つた。

外ではお祭の神輿をかつぎ廻る音がしてゐる。ワツシヨイ！　ワツシヨイ！　景氣をツケロイ！

ワツシヨイ、ワツシヨイ、ワツシヨイ！

次のやうな駄句が出来た。

日二十日ひげ三寸のびたり夏ごもり

九月十日（日）晴。

今日上州の親元へ逃げかへるところをつかまつたといふ十五になる小僧さんが隣の房で泣いてゐた看守が叱ると益々泣き出した。昨日小僧の持つて來た荷物の中に少年俱樂部など、少年雑誌の入られてゐるのを見た。その時、自分はその小僧の身だつたらと、すぐ聯想することが出来た。役人には



それも出来ないらしい。

この三四日、毎日子供が入つて来るので、自分は自分のことのやうに心を痛めた。子供を留置所に入れることは絶対に避けなければならない、このことは機会があれば、現実的な問題として取りあげて行きたいと思ふ。かりに犯罪性のある子供でも絶対にに入れてはいけない。それは、自分がこゝで發見した貴重な材料の一つだ。

昨日も保護室に入れられた五歳ほどの子供が泣いて泣いて泣きやまない時、隣の房のH君が、冗談まじりに「Aさんが子供が好きだからAさんにだましてもらつたらいゝでせう」と役人にいつてゐるのをきいた。自分はこの言葉をきいて、決して不快には思はなかつたが、實際はもつと重い感情に襲はれてゐた。自分は看守の一人にソヴェートの児童保護のことを話して、

「(人生案内)といふ映畫は内務省か文部省で買ひあげた筈だが、見たことはありませんか」と質ねると、看守は、

「然うかね、そんな立派なものなら見たいね。然し、君何事も僕等のところへは来るもんぢやないよ。それではいけないとは思ふんだがね。」

と、新人タイプのこの役人は、やゝ不平らしくいつて、自分のテーブルの仕事に眼をむけた。

外はやはりお祭で賑かだ。解放されてゐる子供等の愉快さうな聲がしてゐる。然しその子供等もやがてその自由を失ふ時が来るかも知れない。いろいろな意味で。

街路に面した窓からひばの葉が廊下につつて美しくおどつてゐる。自分はいつ出られるかといふ見込みがつかない。子供のやうな絶望感に苦しめられた。

ひばの葉のかげは靜かにうつれども  
四角なるこの壁けふも出られず

そのまゝの心持を古い詩形にしてうたつて見た。

九月十二日(火)晴。少し涼しさを感ずる。

S 警部は二階の調室で調書をとりながら、雑談の末、

「僕は君、殆んど学校教育を受けてゐませんよ。僕はこれでアルバイトさ。」

この短い言葉の中に、この慄悍な一紳士が如何に××××××××××のために殊勳をたてゝ來たかを示してゐる。

「身體は何うです。君にはお氣の毒だけでも、行爲に對しての責任だけは持つてもらはなければ困る、君、×××××人まであるんだからね。」



と、Sは私の顔を見て少し笑ひながらいつた。「×××人まである」といふ言葉は自分をちがつた意味で強く打つた。

Sは私の調書を読んだ。調書は自分にとつては不利には書かれてゐないので幾らか安心した。

「Aさん、S同盟を出るわけにはならないかな。勿論、これは官吏としていふのではないが、君がS同盟にゐると、また、今度のやうなことが出来はしないかと思つてね。」

自分は、S同盟を出る必要はない、自分は同盟では殆んど組織活動をしてゐない、然し、作家として同盟の活動を助けて行きたいと思つてゐる、そしてその事は、四五人の友人達にも勧告されてゐることであるから、これから創作活動に入りたいと思つてゐる、といふ意味のことを答へた。

「然うですか、何うせ、君達は轉向なぞといふことはしないでらうけれども、説明書の一つ書いて呉れませんか。」

とSはいつた。

「デマの材料に使ふんでせう。」

と、自分は笑ひながらいふと、

「いや、轉向といふ言葉はあれは君新聞でこさへた言葉で、僕等には関係のないものです。Kは決し

てデマなんか飛ばしませんよ。」

と、Sは少ししやがれた聲で笑つた。

この日の午後、自分は若い歴史家のHが、特高室の取調べから留置所の方へ行くのを見た。自分はまた重いものを胸にのせられたやうな感じがした。

九月十三日（水）曇。

朝早く、自分達の共同體が共同作業を終へて座らうとしてゐる瞬間、廊下の戸が開いて、そこに一人の小肥りのした紳士が現はれた、見るとそれは辯護士團のF氏だつた。

「何うしたんです？」

「辯護士團のこと、……」

この二言で自分達の言葉は遮られてしまつた。自分は静座をしながらF氏の事件をいろいろと想像して見た。

間もなく、自分は特高室のSに呼び出されて、廣庭で寫眞を撮られた。十五六人の若い警官が自分の前にすらりと立つて見てゐた。その内の一人はエロシエンコ君を知つてゐた。

「私は昔よく先生のお話をきいたことがあります。今はこんなことをしてゐますが、お大事になすつ



てください」とその人はいつた。

警官寫眞師はあまりいゝ技術家ではなかつた。二枚だけとつて、叮嚀にお辭儀をした。

「君は専門家ですか？」

「いえ、ただ、させられてゐるだけです。」

と、いつて笑つてゐた。

かへりしなに、S刑事は、

「お氣の毒ですが、もう一つ事件もあるし、少しのびるかも知れませんね。然し長いことはありませんよ。」

と教へて呉れた。

自分は可なり失望を感じた。房に入つてから静座をして見たが、心は少しも落ちつかなかつた。理由のない延期に對して憤りを感じた。いろいろな思索でそれを和げようとしたが、それはたゞ觀念的なものとして止つた。夕食後食ごなしの静座をしてゐると、自分の憤りに「社會性」の失はれてゐることを見つけ出して、耻しくなつた。顔がほてつて來て、少し發汗してゐる。手ぬぐひで全身を摩擦した。すると感胃の癒りかけの時のやうな軽い氣持になつた。夜は比較的安眠した。

### 九月十四日（木）解放の日。

「日光がよく輝いてゐた。」

今日Kに頼んでひげを當らうと思つた。

ひる頃、Kが戸の外で自分の名を呼んでゐる。厚い房の戸が開かれて自分は外へ出された。暗い廊下を通つて二階へ上りかけた時、

「Kさん、今日ひげを當らせてくれませんか。」

といふと、Kは

「あなたは今日出されますよ。今お家から剃刀を取りよせますから。」

といつた。

自分はKの言葉を信ずることが出来ないほど嬉しかつた。Kの口から別な言葉が出やしないかと、問ひかへすことさへ出来なかつた。

「然しまだ誰にもいはないやうにしてください。」

とKはつけたした。

「特高室では、まだ自分の出ることを知らなかつた。主任は、」



「長い間お氣の毒でした。Aさんも落ちついて創作をしてください。さつぱりしていゝ氣持になつた  
でせう。」

といった。

Kは私のために金盥に湯を一杯に持つて来て呉れた。自分は家から届けられた西洋剃刀でひげを當  
らうとしてゐると、主任のOはあわてゝそれをとめて、

『Aさんは始終それを使つてゐますか。随分錆びてゐますね。』  
といった。

「いえ、僕は安全剃刀でやつてゐます。何うしてこんなものをよこしたんでせう。」

「然うでせう。そんなもので咽喉でも切られたら大變です。安全をお貸しませう。」

といつて、Iといふ部長の剃刀を貸して呉れた。

自分はひげを當り、洋服を着て、調室に出かけた。すぐ近くのテーブルでは、若い電氣技術家のI  
君が手記の筆を走らせてゐたが、自分のそこにゐるのを見つけて、

「もう、お歸りですか？」

と、少し蒼ざめた顔を自分の方に向けて叮嚀にいつた。

「え、身體を大事にしてください。君も一日も早く出るようにしてください。」

この言葉は、自分は幽閉生活者全部に傳へたい言葉であつた。なぜなれば、自分の釋放がいひ渡され  
てから、二度と房へ歸して呉れなかつたので、共同生活者に別れを告げることが出来なかつたから  
である。私はテーブルに腰かけながら、あの暗い共同體の中にある共同生活者の色々な顔、殊に長い  
間、光を求めて興へられないでゐる若い二三の人々の顔を、もう一度自分の腦裡にしつかりと烙印し  
やうと努力した。

「この石の塀の蔭にお父さん達がゐたんだよ。こゝに毎日三十人ほどの人間が日光を見ずに暮してゐ  
るんだ。」

と、私は署を出てから、迎へに來た娘の千代子にいつてきかせた。

外では九月の日光は金粉のやうに降りそゞいでゐた。

(一九三三、一〇、二二)



五十年生活年譜

昭和十一年四月十三日印刷納本・昭和十一年四月十七日發行

不  
許  
製  
復

11.4.13

著者 秋田雨雀  
發行者 東京市神田區神保町二ノ一三 大竹博吉  
印刷所 東京市小石川關口水道町四六 和交社印刷所  
發賣所 東京市神田區神保町一ノ一 上田屋書店  
發行所 東京市神田區神保町二ノ一三 ナウカ社  
電話九段一七二三・振替東京八〇一四七

定價八拾錢



Vertical text on the left edge of the left page.

第十卷

第十卷

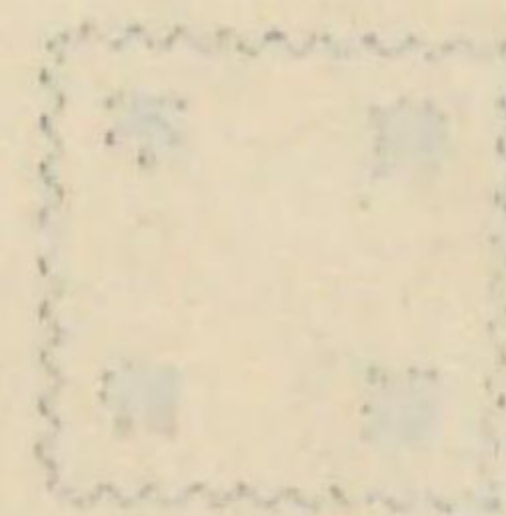


Table of contents or index with multiple columns of text.

第十卷



Handwritten text on a small label in the top left corner of the left page.



100

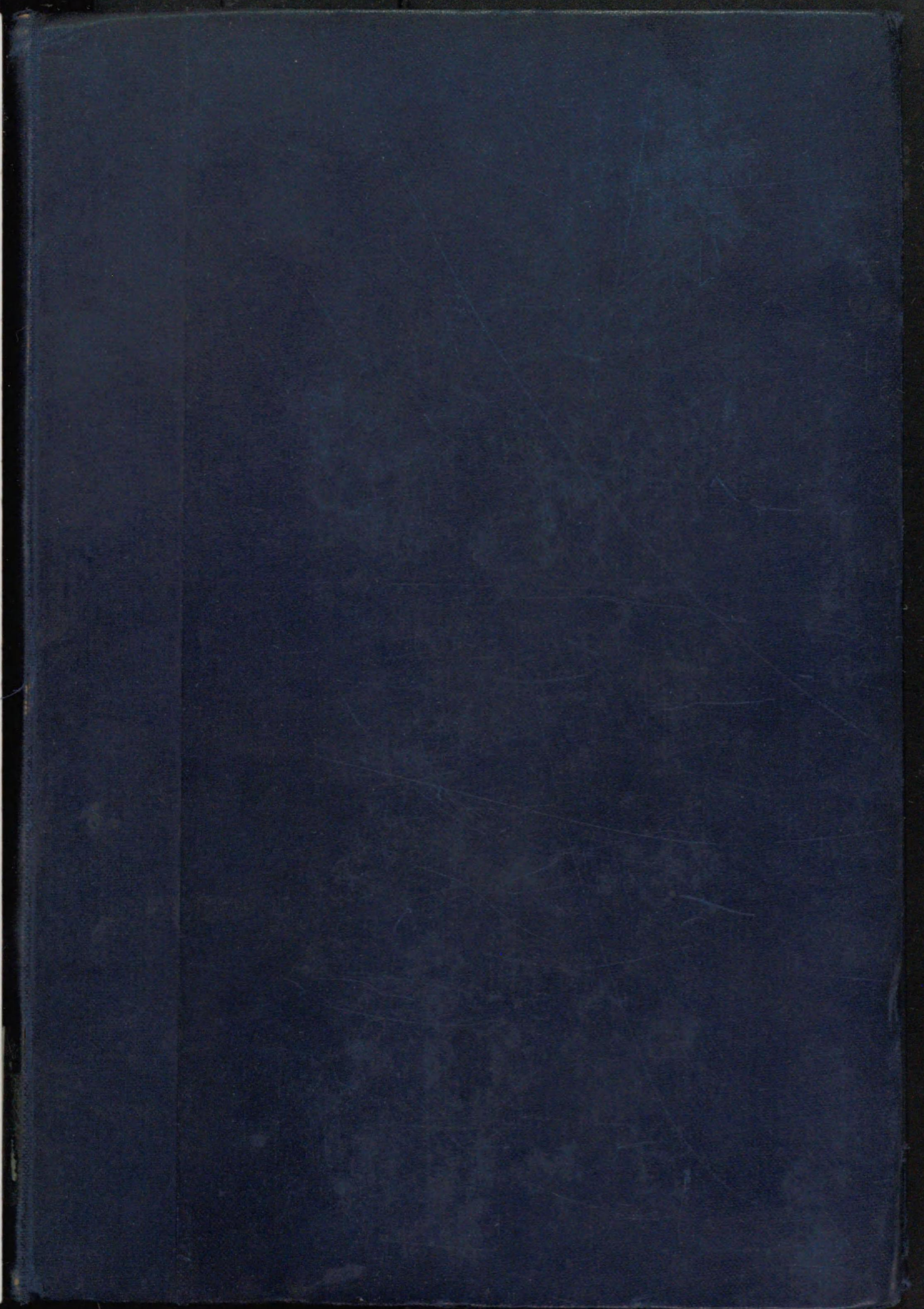
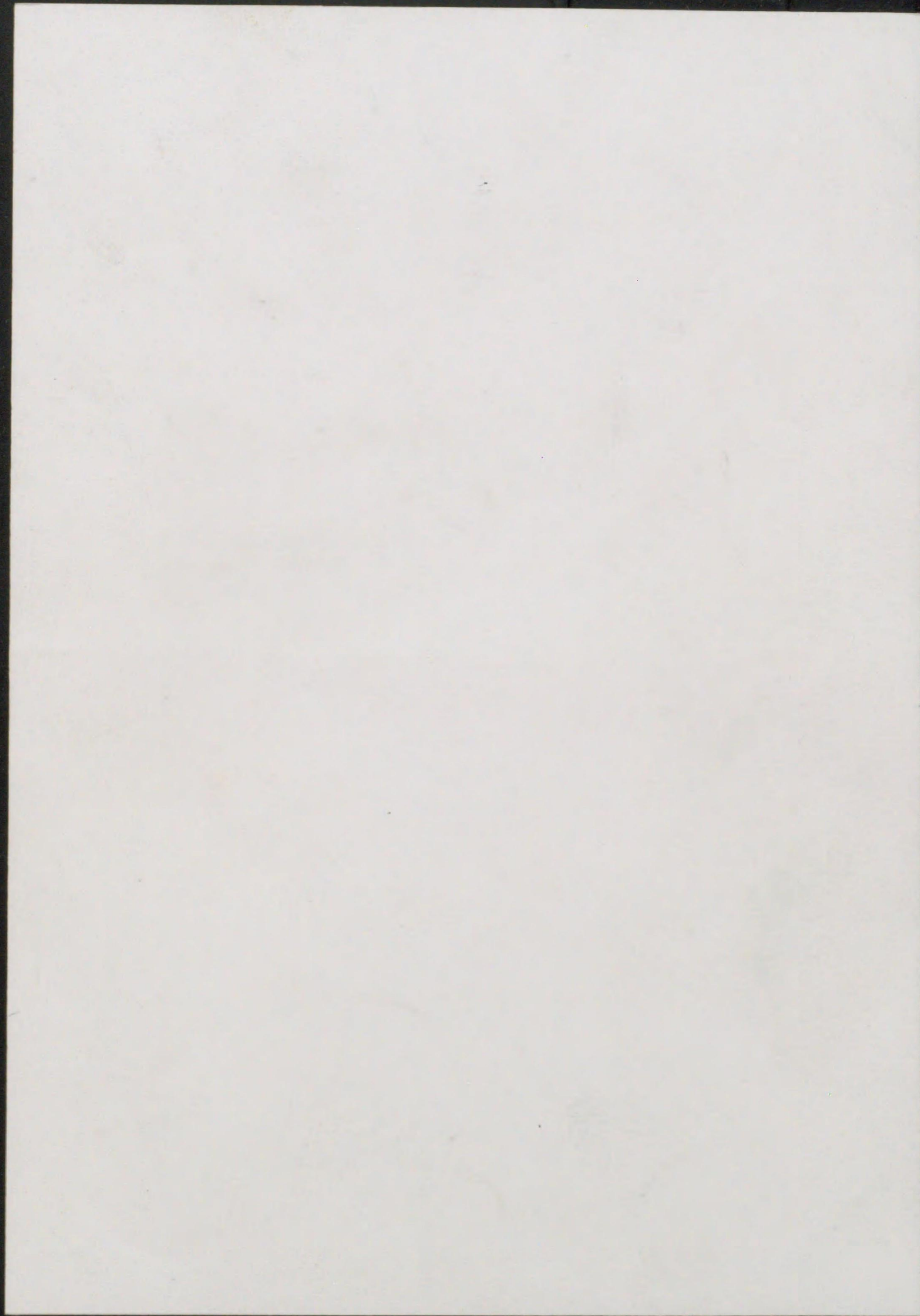






703  
93





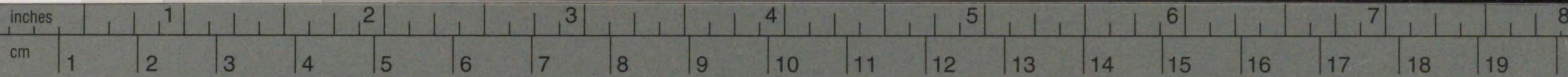


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

